

# 富山県氷見市九殿製塩遺跡

## 調査報告書

1975年3月

氷見市教育委員会

## 報告書発刊に当つて

九殿遺跡発掘の報告書を発刊することが出来ました。永見市が九殿浜に漁業栽培センターを建設するに当たり道  
路があればこれをさけたいとする市の希望に従つてこの発掘は始まったのであります。団長だった鳴尾正一先生  
が発掘に先立つて病床の身となられ、床中から種々指導をされていました。第一回発掘の終った後、数日にして  
不帰の客となるという不幸を中にはさみ、引つづく第二回発掘まで新設される漁業栽培センター敷地(予定)  
内には製塙道路が含まれてないことが明らかになりましたので一応発掘を終り、その調査結果をここに上梓する  
ことにしました。

第一回の発掘では

8月19日～25日の間は、橋本澄大、岸本雅敏、漆巣、児島清文、白岩淳雄、奥田直孝、細川真樹の諸氏と  
小生ならびに水高歴史クラブ員、市教委の社会教育課員らによって発掘作業がすすめられ、8月26日～31日の  
間は、岸本雅敏、漆巣、細川真樹の諸氏と市教委社会教育課員らによって発掘作業が行なわれました。

第二回発掘では

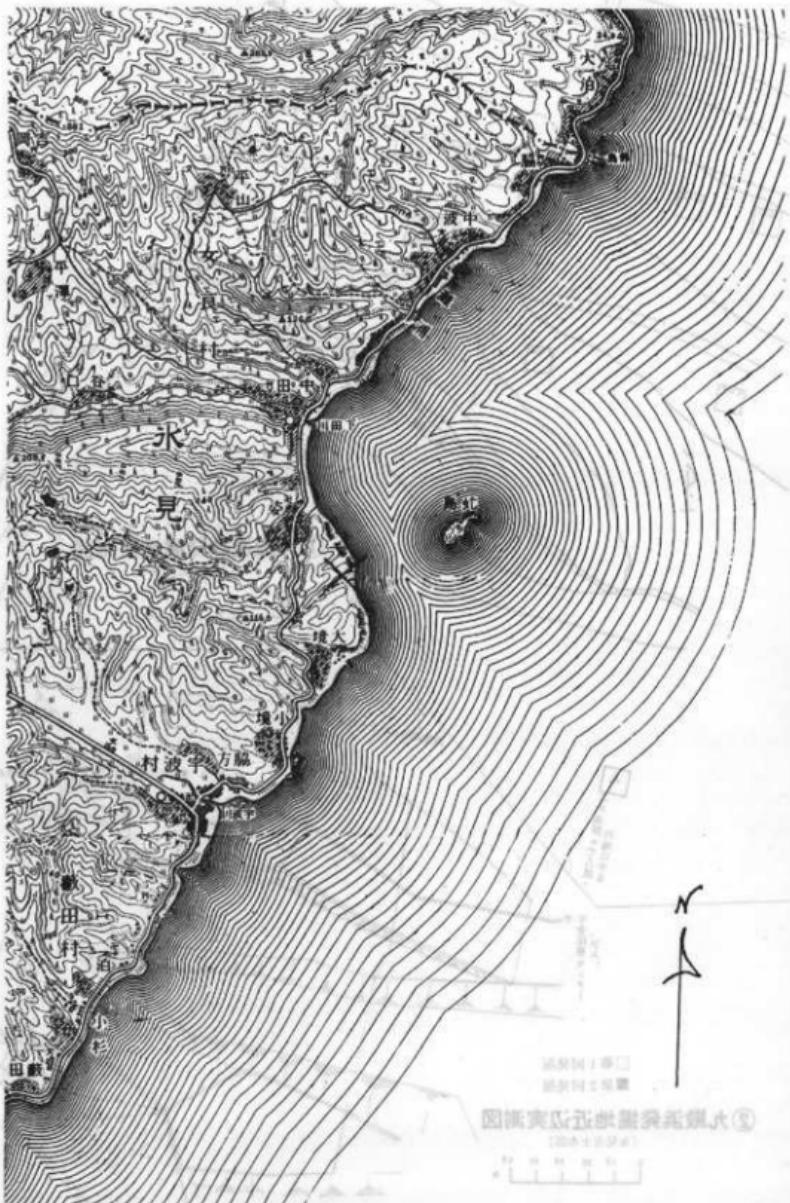
10月29日に、漆巣と小生の外、市社会教育課員、市水産商工課員らによって発掘作業が行なわれました。

從つて、この報告書は、永見高校歴史クラブの報告をもとに小生が手を入れたものであり、8月26日～31  
日の記事については岸本雅敏氏の「永見市九殿浜遺跡調査概報」によるところが多いのであります。

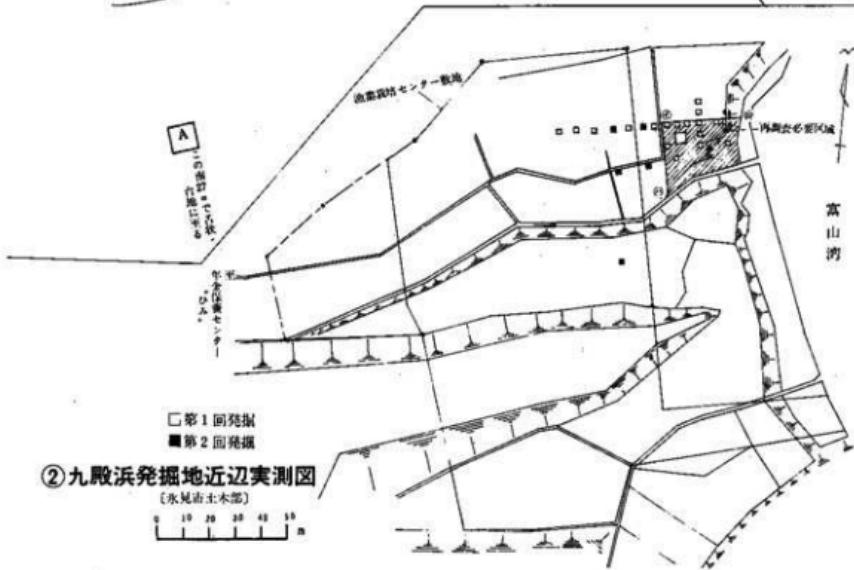
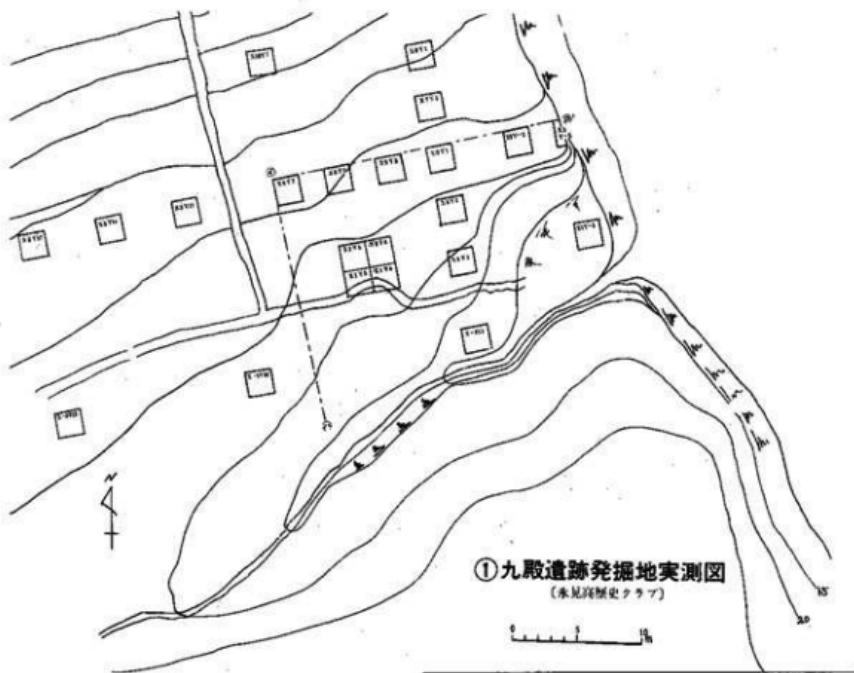
この報告書を出版するに当つて発掘の指導や能登半島関係製塙遺跡諸資料の概観、提供に御協力いただいた石  
川考古学研究会の橋本澄大氏、発掘指導に当られた県文化課の岸本雅敏氏、全国製塙遺跡に関する諸資料の提供  
や貴重な御意見を賜った岡山大学の春成教授、小野助手に感謝の意を表するものであります。

昭和50年3月

永見市教育長 齊藤道保



1図 遺跡付近図 (1/50000)



## 2図 発掘地実測図

## 1. 遺跡の所在地

氷見市姿字九殿

200, 201, 202, 208, 209, 213, 214, 217, 218, 219, 番地。

灘浦海岸にそった国道160号線は、道幅も広くなり、舗装もすんすく整備された観光道路になった。

海のむこうに二上山や岩崎鼻の燈台が望まれ、さらに遠く岩瀬浜や富山湾ぞいの町並が細い長い線状に連なり、晴れた日にはその背後に立山連峰が白雪で緑どられた藍色の雄姿を浮ばせる。このような美しい景色を眺めながら氷見の市街から北に約10km、この道路を七尾に向ってたどり、大境の部落を右手にみながら岬をのぼりつめ、やがて姿の部落に入ろうとするところに、東の方、海側に国民年金保養センター“ひみ”的近代的な建物が見える。

九殿遺跡は、この保養センターの崖下からさらに東に向って割合広く展開されている谷間の畠地の礎際に存在している。南北を山塊に囲まれて東方が海に臨んでいる地形である。ここから見る虹ヶ島が一番美しいといわれている。(1図参照)

姿部落が現在地に形成される前は、この九殿にその部落があったという伝説もある。冬期は北東方から高波をうけて侵蝕が目立つ。

## 2. 調査の目的

この遺跡の海岸側は長年の侵蝕によって2mから3mの切りたた崖になっている。昭和30年6月に、ここで畑の耕作に従っていた広沢周曹氏からの報告によって氷見高校歴史クラブが調査をして製塩土器の尖底部数箇と他の土師器や須恵器の破片などを採集している。

昭和49年になって、この谷間の畠地の中央部に漁業栽培センターが建設されることになり、侵蝕の甚しいこの地に、なお製塩遺跡が残存しているかどうか、漁業栽培センターの建設敷地内にその遺跡が含まれているかどうかを調査することになった。

能登半島の古代製塩遺跡については、石川考古学研究会の橋本澄夫氏、高堀勝喜氏、岡山大学の近藤義郎教授らの報告にある通り、昭和29(1954)年頃から関心がもたらされ、同年の志賀町小浦海岸遺跡の発掘をはじめとして、昭和34(1959)年の珠州市森腰遺跡、七尾市庵遺跡の発掘など数回の調査が行われ、その遺跡の分布も、富山湾に面する内浦を中心とし、富来、羽咋の外浦に及ぶ約150ヶ所が明らかにされている。

地形的みて、おそらく氷見地方の灘浦海岸にも、これらと関連のある製塩遺跡の存在が考えられるのであるが、この九殿の浜以外は未だ明らかにされていない。おそらく海岸沿いの道路づくりなどの折に埋没されたりしたのではないだろうか。

この九殿遺跡は道路から遙に離れた海浜で、人工的施設に恵まれなかったことが、その残存に幸運であったのかも知れない。

## 3. 調査の経過

### (1) 調査団の編成

昭和49年7月2日、九殿製塩遺跡試掘についての第一回打合せ会が開催され、次のような調査団が編成された。

団長 峰尾正一(県文化財専門委員、氷見市文化財審議委員長)

調査員 渡 長（富山考古学会長、日本考古学協会員）  
齊藤道保（県立水見高校長、日本考古学協会員）  
円仏三郎兵衛（女良小学校長）  
児島清文（市文化財審議員）  
白岩淳雄（水見高校歴史クラブ顧問）  
奥田直孝（同 上）

なお、発掘には主として水見高校歴史クラブの協力を受けることとし、発掘指導には齊藤、白岩、奥田が当ることにした。

また、製塙遺跡発掘は県内では初めてなので、製塙遺跡発掘に経験のある適当な指導者を招くことを決めた。

これは、後日、能登半島製塙遺跡発掘経験豊かな石川考古学研究会の橋本澄夫氏と、岡山大学で近藤義郎教授の指導を受けた県文化課の岸本雅敏氏とを招くことになった。

また、調査は8月20日（火）より開始することにし、調査員に細川真樹（高岡第一高校教諭）を加えた。

## （2）第一回調査

調査期間 昭和49年8月19日～8月31日

調査概要 8月19日、調査団員ならびに市教委社会教育課員によって現地打合せを行なった。下草刈は20日から始まった。

8月21日、海岸線に平行して、ほぼ南北にむかうものと、之に直角に海岸から谷の奥へ、ほぼ東西に向う2m×2mづつのグリッドを設定して発掘を行なうこととした。（2図参照）

これらのグリッドにおいては、一般に土の堆積が厚くて、自然砂層に到するには1.5mから2mの深さにまで掘り下げなければならなかった。X9からX-3に至るY1軸の各区の発掘は23日で、Y7からY-5に至るX5軸の各区の発掘は24日で一応終了し、壁面の実測が引きついて行なわれた。

25日には前日から始っていたX10Y7、X1Y-5の2地区の発掘と、新たにX2Y5区の発掘にかかった。

これまでの各地区からの出土遺物は極めて少量で、かつ細片が多かったが、X2Y5区からは多量の土器が集中して出土した。

このX2Y5区周辺は、昭和30年に広沢周曹氏が耕作中、土器を多数据出し、水見高校に報告した地点である。ここには何らかの遺構の存在が想像された。

26日から31日までは比較的降雨日が多く、作業も難渋したが、X2Y5区についてX2Y4、X1Y5、X1Y4の地区を発掘するほか谷の奥地区的坪堀りを行なった。

この坪堀りでは遺物は全く無かったが、X2Y5、X2Y4、X1Y5、X1Y4の区画からは、引つづき多数の土器片が出土した。

なお、X4軸を海辺まで延ばした崖ぶちの中腹からも、多數の土器片が採集された。

X2Y5、X2Y4、X1Y5、X1Y4の各地区では岸本雅敏氏の報告によると火をたいた痕跡が認められ、ここにあるいは炉址があったのではないかという推定がなされた。

第一回調査終了後、9月14日、調査団は会合をもって第一回発掘の反省を行ない、席上、X5Y7区以東以南で小川と海岸に囲まれた区域を「再調査必要区域」とし（2図①イロ、イハ）現状の保存を希望し、小川以南の台地は未調査に付「確認調査必要区域」とすることを決定した。

（2図①②参照）

## （3）第二回調査

昭和49年10月、漁業栽培センター敷地の候補区画が調査団に提示された。この中に、第一

回発掘の結果、確認調査を必要とする区域にした小川南方の台地が含まれていたことと、遺跡の範囲再確認の意味で第二回の発掘調査を実施した。

調査期日 昭和49年10月29日

調査概要 前回の発掘との関連もあって、漁業栽培センター敷地外のX5Y11区、X-3Y10区と敷地内のX5Y17区、X-3Y17区および敷地内で小川の南方の未調査台地上のA地区との5地区の発掘調査を行なった。（2図①、②参照）

全地区よりの遺物の出土は極めて薄くX5Y11区に於てのみわずかな土器片を得たのみであった。

X5Y11区では地表下1m～2.5mで純砂層に達したが、この砂層上の東南部に厚さ3～10cmの白色粘土層があった。X軸上で、このような粘土層はこれより西方では見ることが出来なかつた。（6図参照）

X5Y17区では7.5cmの深さで黄白色砂層に達した。この黄白色砂層は、X5軸で海岸からY11区にまで伸びて来ていた灰白色砂層とは明らかに異った自然砂層であった。

（6図参照）

X-3Y17区とX-3Y10区とでは各々地表下8.0cm、11.5cmで自然砂層に達したが、遺物の出土は無く湧水に苦しめられた。（7図参照）

小川南方の台地上のA区では、地表下7.5cmで砂層に達したが、その上層の赤褐色土層は固い層で共に遺物は皆無だった。（7図参照）

この結果、氷見市が漁業栽培センター候補地としている敷地内には製塩遺跡は含まれていないと考えられたので、前回発掘の結果、現状保存区域としたX5Y7区以東以南の海と小川で囲れた区域の現状保存を図るよう答申することに決定をして調査を終了した。

#### 4. 遺跡・遺構

##### （1）地層

九段浜遺跡近辺の地層は、地表からいうと赤褐色粘土質土層、黒褐色粘土質土層、灰褐色粘土まじり砂層、灰白色砂層の四層からなっている。このうち赤褐色粘土質土層と黒褐色粘土質土層との境界は判別が頗る困難であった。

おそらく灰白色砂層の上に、海水位の上昇によって汀線が後退し、山裾を洗った波浪によって堆積したものが灰褐色粘土まじり砂層であり、この上に北側山塊の赤褐色粘土質の土壤が風雨によつてもたらされて厚く覆いかぶさって層序をつくったものであろう。黒褐色粘土質土層は赤褐色粘土質土層の下部が湿氣を帯びて黒褐色を呈しているとも見られる。

南北に向っているY1軸でみると（図6参照）灰白色砂層や灰褐色粘土まじり砂層はX3Y1区以北では、ほぼ水平で、北方の山裾に至るほど、その上に赤褐色粘土質土層が厚く覆いかぶさっている。これが地表における高まりともなっている。

X3Y1区から灰白色砂層や灰褐色粘土まじり砂層が急激に低下するのは、砂丘面の海へ向つての低下と考えてよいのではなかろうか。

東西に向っているX5軸でみると灰白色砂層はX5Y3区を頂点としたX5Y-3区からX5Y6区に及ぶ高まりとX5Y9区を頂点としたX5Y6、からX5Y13区に及ぶ高まりがあるが、これは南北方向の小小丘が並んでいたと考えて良いのでなかろうか。灰褐色粘土まじり砂層は、このX軸についても比較的の平坦である。

以上から、灰白色砂層は南北方向にむいた小砂丘で、南端は小川に臨んでいたらしい。しばらく地表面となっていたらしいことは、後述の土器出土状況から想像される。その後、海水に覆わ

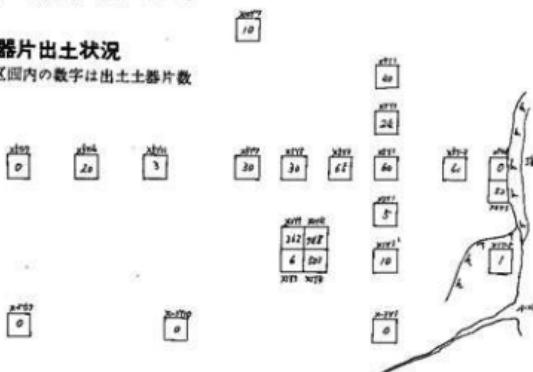
れてつくられたものが灰褐色粘土まじり砂層である。だからこの層は平坦な表面をもつてゐる。能登の遺跡において、岡山大学近藤教授は、同様な地層に対して、土器の微粒片を含んでいるので、灰褐色を呈するのであろうという見解を示されている。海水に洗われている間に焼成の悪い土器は微粒片となって混入したのであろう。

X 5 Y 1 7 区になると表土につづく赤褐色粘土質土層の下に黄白色の自然砂層があり、いままでの灰白色砂層とは明らかに異質の自然砂層が存在している。灰白色砂層が地表面となっていた時期には、この黄白色砂層は地表面となっていたのではないかと思われる。

## (2) 遺構

遺物の出土量は決して多いとはいえないし、しかも細片が多かった。グリッドからの出土点数は土器出土状況図の通りである。

土器片出土状況  
各区画内の数字は出土土器片数



土器の出土はみられなかった」とのべられている。岡山大学の近藤教授は、能登の庵、城ヶ崎などの製塩遺跡では、土器と共に炭灰が多く伴出し、土器と共に炭灰が同時に遺棄された事が察せられるとして述べておられる。

X4Y-5区は崖際なので発掘が出来ず、崖際から露出している土器を相当量採集したが、ここにも何等かの遺構がありそうで製塩遺跡に多い土器捨場の一つでないかとも考えられた。

## 5. 出土遺物

前述したように出土した遺物はあまり多くなく、みかん用ダンボール箱のほぼ二箱分である。

出土遺物は全て土器類で、その大部分が製塩土器片である。この他、若干の須恵器と土師器とが伴出している。(8~11図の土器写真ならびに12図の土器実測図参照)

### (1) 製塩土器

いずれも能登式製塩土器と称されているもので、指先でつまみ伸したような棒状の尖底部を特徴とする。橋本澄夫氏の分類によると能登式土器C類型式のものである。この型式のものは七尾湾から珠州岬付近に至る内浦海岸全域に分布しているといふ。

本遺跡からは約30個の棒状尖底部(12図中段1~22)とこれに関連すると思われる素焼の土器片とが多く出土した。

近藤義郎、橋本澄夫氏によると、能登の野崎遺跡の製塩土器はラッパ状に外反する口縁と細長い胴部と指先で引きのばしたような尖底部をもつ(左図参照)というが、本遺跡ではあまりラッパ状に外反した口縁部は発見できなかった。むしろ直口型の口縁片と考えられるもの(12図6~8)や胴部と考えられるものがあった。(11図9)



#### 内浦町長尾出土

胎土には砂粒の混入があるものと、全く之の認められないものがある。

### (2) 須恵器

蓋付の壺の身部と考えられるもの(12図、13~15)、蓋の一部(同17)、深鉢と考えられるもの(同16)などがあり、器面には、たたき目のあるもの、櫛描波状文のもの、繩文手法のうかがえるもの(同下段5~7)がある。

### (3) 土師器

製塩土器以外のものでは、瓶(こしき)の把手(11図6、7)、土鍤(どすい)(8図2、12図18)、高壺(10図11、12、12図12)や盤(まり)や壺と思われるもの(12図5、11)、甕の口縁部(12図1~4)甕の口縁部(12図9、10)などがあり、底部には糸切のあとが残っている(8図9、12)ものがある。底部の径は5~6cmである。

高环は口径2.2cmで环の内面は黒くぬった内黒土器である。出土状況は5図土器出土状況写真のように环部を下にして出土した。

樺本澄夫氏は、このような尖底の製塙土器は大体7世紀頃のものと推定されている。

## 6. 結 び

九殿製塙遺跡は能登半島内浦を中心として海岸ぞいに割合に濃密に分布している土器製塙遺跡と深い関連をもつものである。

瀬浦海岸には、九殿浜のような湧水と林地を背後にもつ土器製塙に適した場所がいくらもあつたらしいが、道路の改良等で今はそのおもかげがなくなった。従ってかつては存在していたと考えられる土器製塙の遺跡も、現在は知る由もなく、この九殿遺跡が現在知られている県内唯一の土器製塙の遺跡である。

製塙土器は指先で引き伸ばしたような棒状の尖底をもつたもので、10cm以上の長さの胴部をもち直口型の口縁部をもっていたものと想像できる。時期的には7世紀を下るものであろう。

現地表下1.5m~2mのところに存在する灰白色砂層が当時の生活面と想像されるが、出土土器量、遺跡のひろがりからみて、期間的に長いものではなく、規模的にも大きなものではないようである。

灰白色砂層上に所々見られた粘土層が遺構とどう関連するものかは、これから解明せねばならぬ問題である。

市で考えている漁業栽培センターの敷地内には土器製塙の遺跡はないと考えられる。ただ、X5Y7区以東の海岸に至る迄と、以南の小川に至る区域（2図①イロ、イハ、②参照）は、将来の発掘調査まで、現状のまま保存されることが望ましい。

### 九殿遺跡関係文献

富山県氷見地方考古学遺跡と遺物（氷高歴史クラブ報告書No.11）S. 39. 8

氷見市九殿浜遺跡調査概報 S. 49. 9 岸本雅敏

× ×                  × ×

この稿を終るに当たりこの発掘に従事した氷見高校歴史クラブ員、氷見市教育委員会社会教育課員、商工水産課員の氏名を記してその協力ぶりに御礼を述べたい。

#### 氷見高校歴史クラブ員

O B 北元 洋 新宅英隆 吉坂田加夫 水元健蔵

3年生 伊藤賢治 上森優子 堀田かの子 谷口京子 棚田淳子

2年生 浜田義博 狹間 茂 山崎みみ子 広田淳子 春田亮子 山崎美恵子 橋本圭子  
山崎裕美

1年生 福田和人 滝下松次 寺藤久美子 西川弘美 太田弘子 滝沢麻美子 奥原恵子  
片山好美 小林秀美 横森優子

#### 市、商工水産課員

松木利作（課長）蓮間秋男（係長）長谷川鎮治（係長）北本淨丸、宮本鉄和、仲谷一武  
川崎辰丈、高嶋義嗣、茶山秀男

#### 市、教委、社会教育課員

岩上節男（課長）広瀬洋亮（係長）丸山久敬（同）大庭道美（同）曾根芳明、福井 弘  
浦野修治、東海慎一



遺跡全景  
(縦景、虹が島)

グリッドの掘さく(Y1軸)

3図 発掘地風景



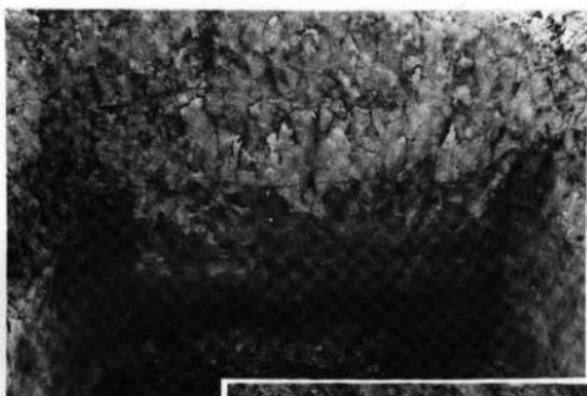
グリッドX 5 軸の発掘

X  
1.2  
Y  
4.5  
区の発掘(立った人物のいるところX 1 Y 4区)

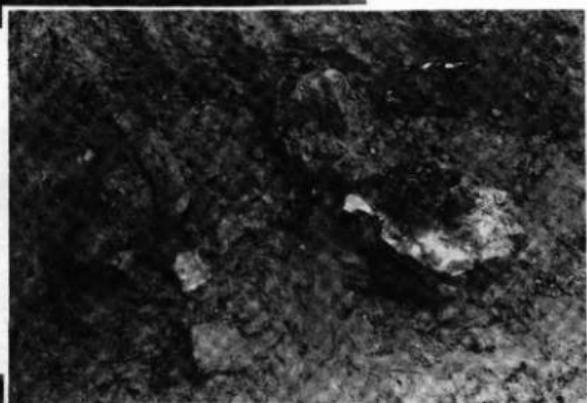


4図 発掘風景

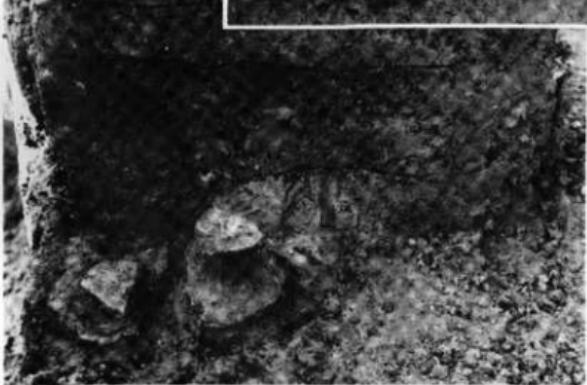
X 5 Y 7 区の地層



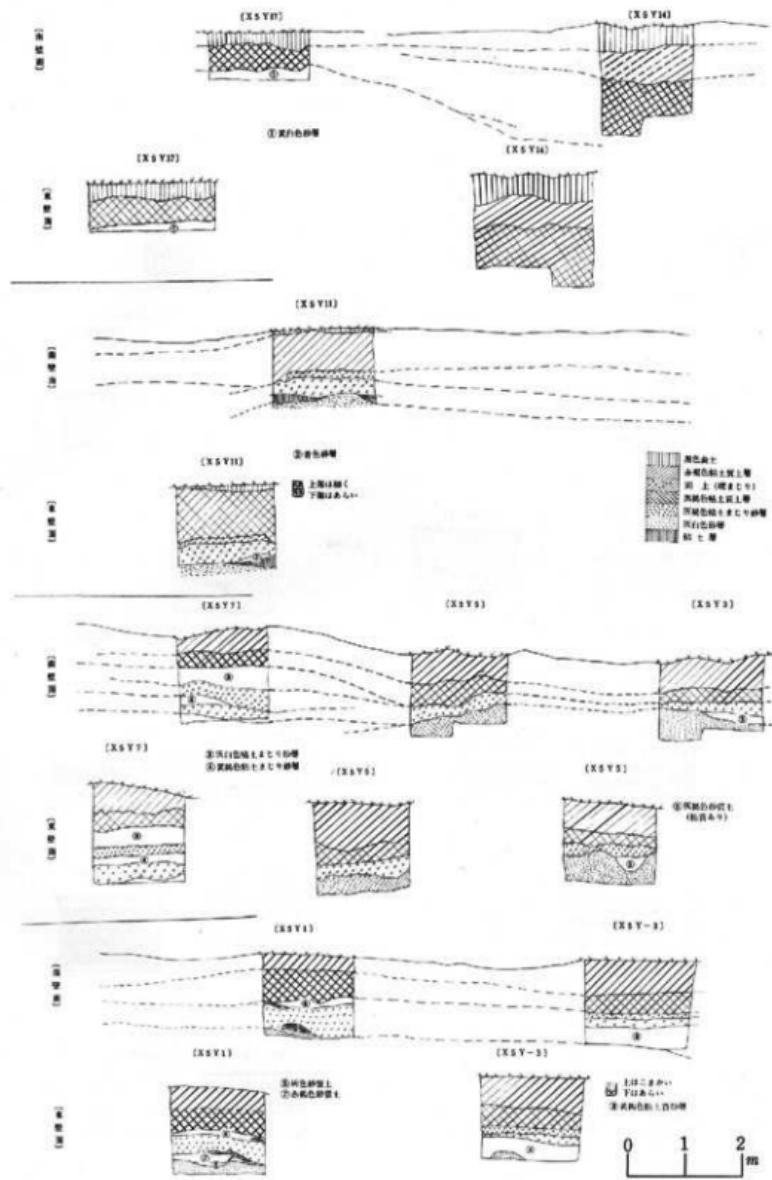
X 2 Y 4 区、炭化物の  
付着した土器の出土



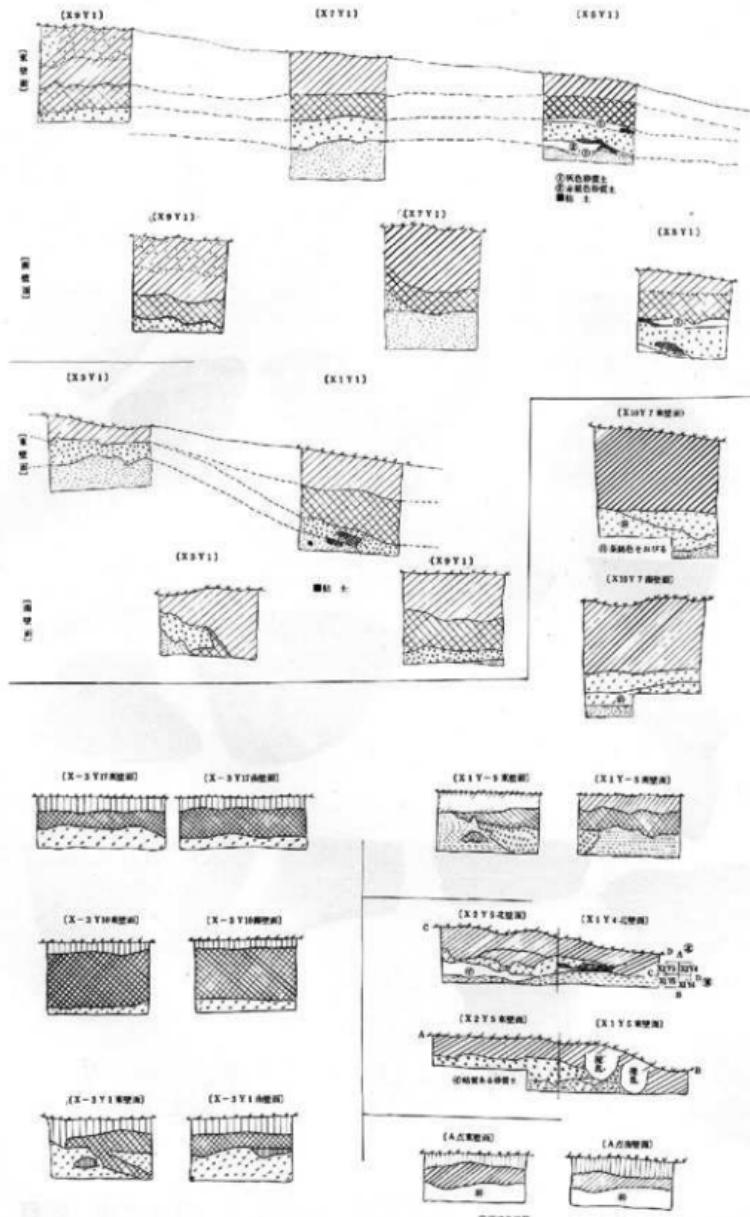
X 1 Y 4 区  
高坏の出土



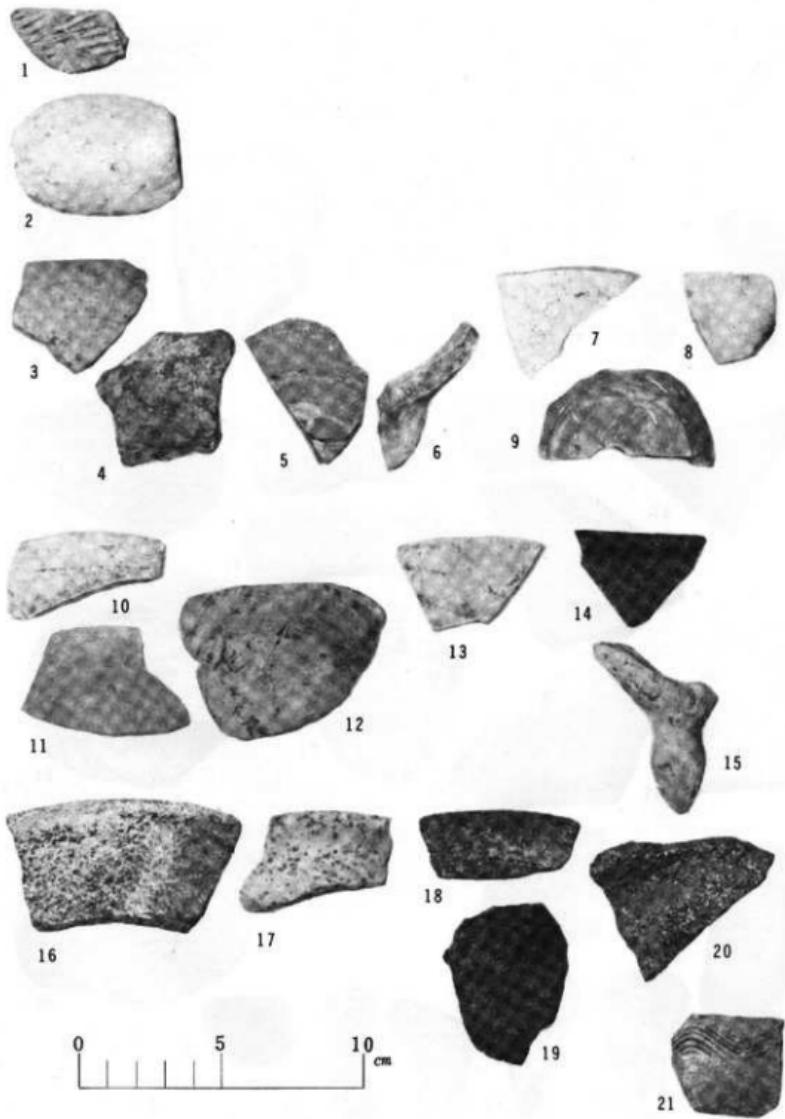
5図 地層と土器の出土



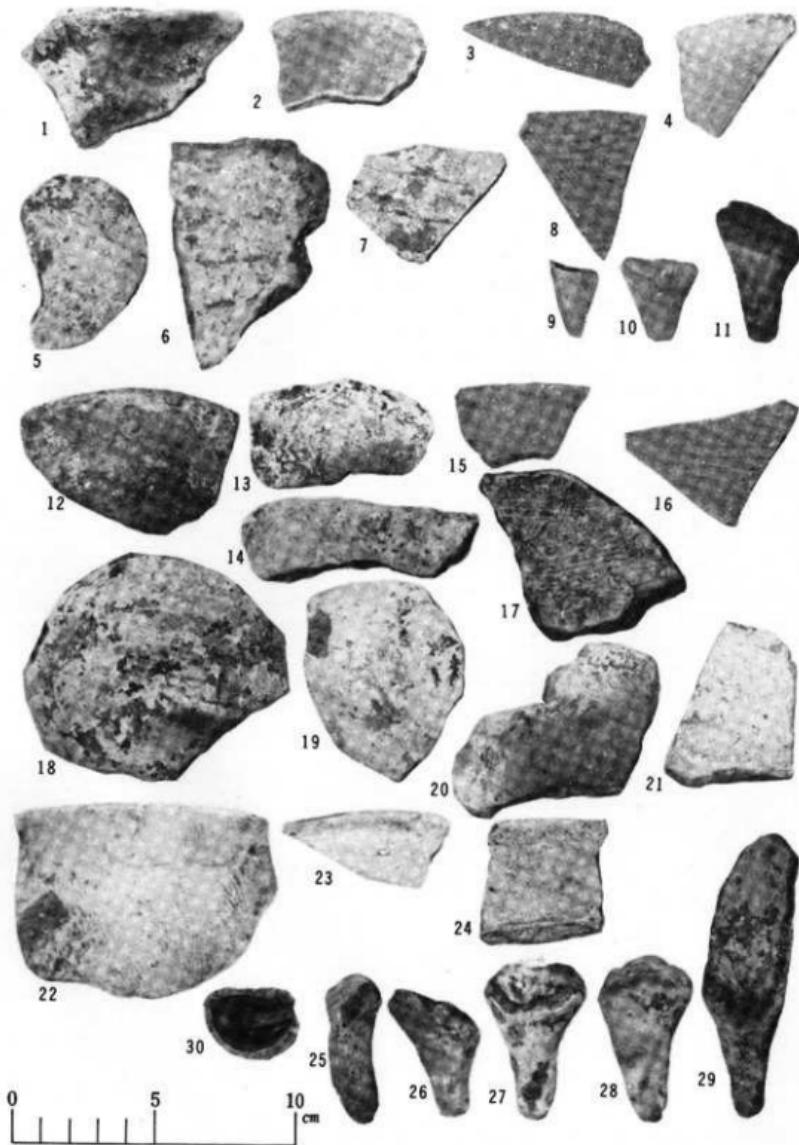
6図 発掘地地層 (X 5 軸)



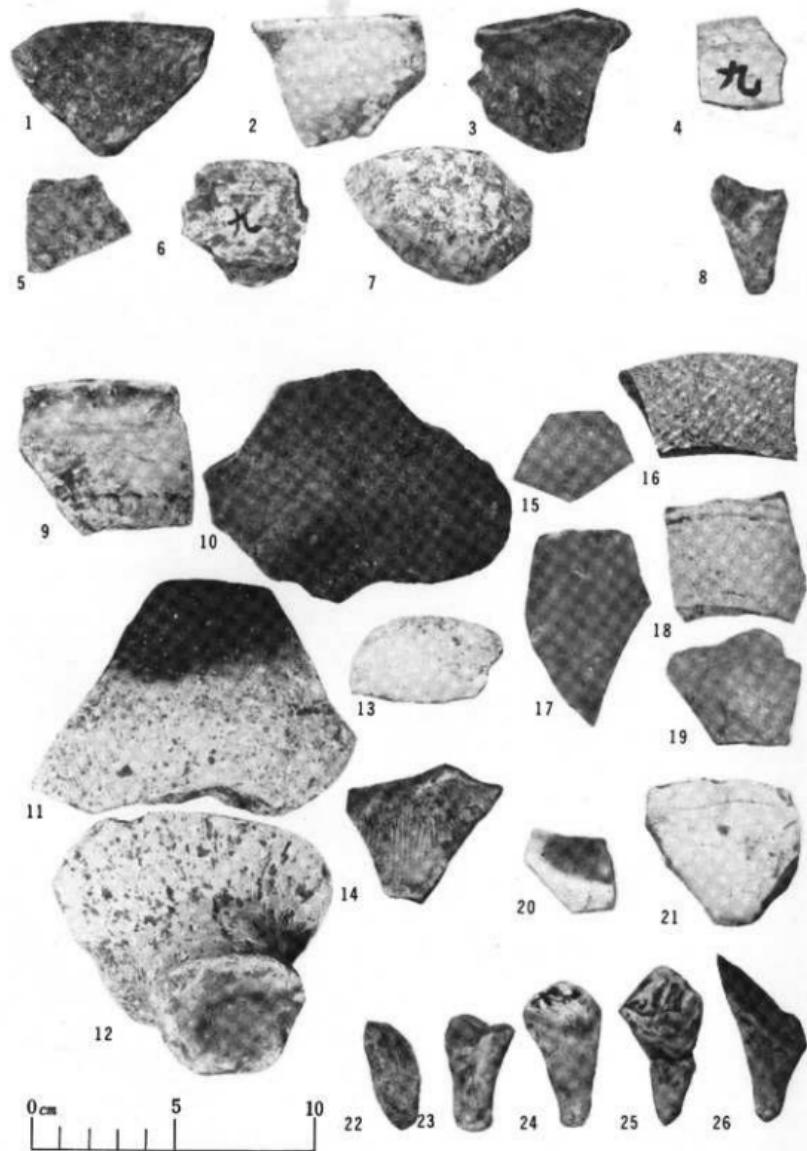
## 7図 発掘地地層 (Y1軸) その他



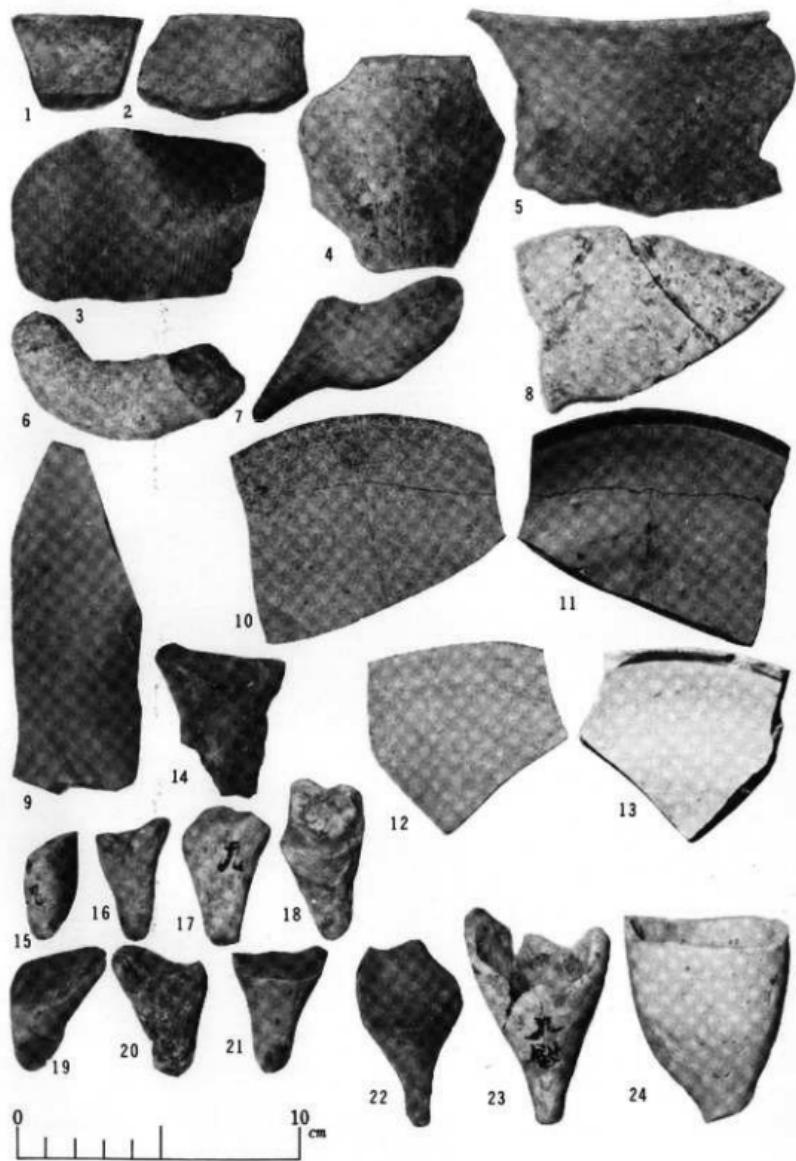
**8図 出土土器** 1…X 9 Y 1区 2…X 7 Y 1区 3～5. 7～9…X 5 Y 1区  
6…X 5 Y 3区 10～15…X 5 Y 3区, 16～20…X 4 Y 5区, 21…X 2 Y 2区



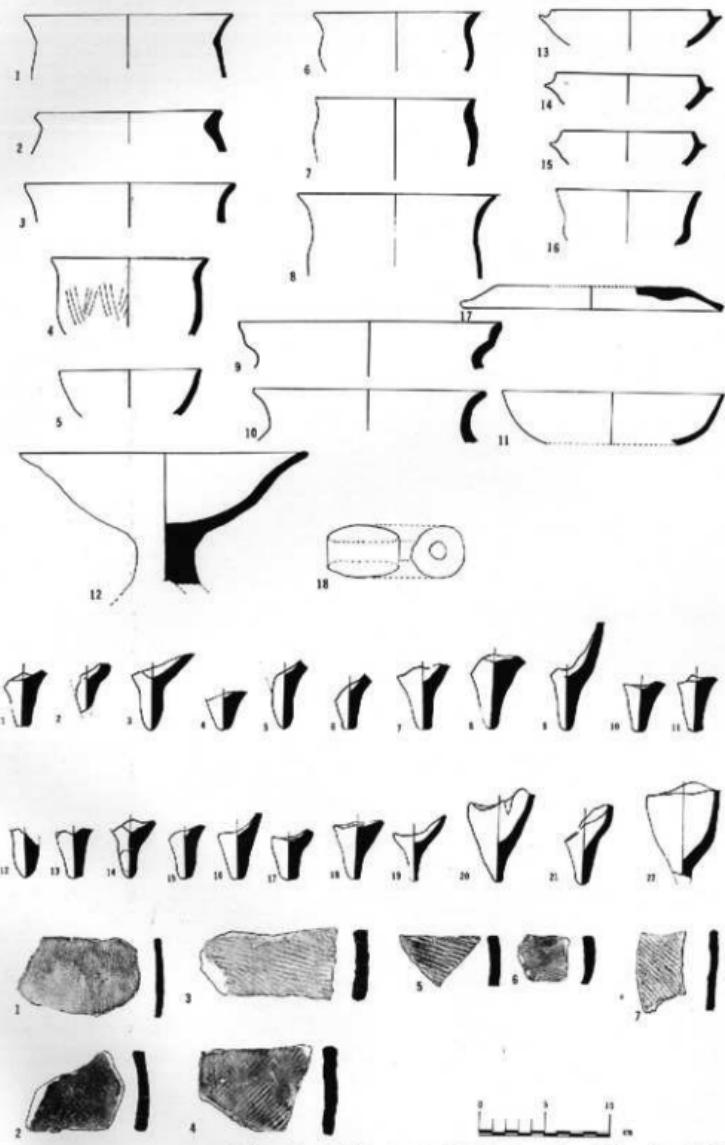
9図 出土土器 1~11…X 2 Y 5区 12~30…X 2 Y 4区



10図 出土土器 1~8…X1Y5区, 9~26…X1Y4区



11図 出土土器 1~24…昭和30年採集 (10, 11, 12, 13…須恵器)



12図 土器実測図  
上段1~12 土師器  
下段1~4 土師器 13~17 須恵器  
5~7 須恵器 18 土鍬 中段1~22 土器尖底